

# 好きで鈍器は持ちません！

～鍛冶と建築を極めた少女は、デカイハンマーで成り上がる～

山田どんき

---



ファンタジア文庫

3012

## ハンナ・ファルセット

ソルトラーク冒険者  
学園を追い出された  
新米冒険者。餓死寸  
前のところを、ある  
工事現場の棟梁に拾  
われる。そこで手に  
したハンマーにより  
才能が開花し——!?



Hanna Falset

# Characters

登場人物

SUKI-DON

## ローゼリア・シュルツ



Roselia Schultze

ダークエルフの魔  
術師。セシルの親  
友で、いつもべっ  
たりと隣にひっつ  
いている。どんく  
さいハンナをいつ  
も小馬鹿にしてい  
たのだが……?

## セシル・ソルトラーク



Cecil Soltaraque

ソルトラーク冒  
険者学園の理事  
長である【剣闘  
王】バゼルの娘。  
学園首席で、ティ  
アレット最強と  
の呼び声も高い。  
落ちこぼれだっ  
たハンナを目の  
敵にしている

## ミラ・カーライト

ティアレットに  
あるオンボロ薬  
屋の一人娘。生  
まれつき感情を  
顔に出すのが苦  
手で、常に無表  
情。周囲からは  
怪しい薬師とし  
て悪い噂が流れ  
ている



Mira Carlright

## ガレ・アルセリア

ハンナがルドレー  
橋の魔物退治の時  
に出会った少女。  
橋の監督官である  
父を持ち、現場の  
手伝いをしている。  
天真爛漫で、誰に  
でも人懐っこい



Gale Alseria

## 第一章 鈍器覚醒

昔から、冒険譚を読むのが大好きでした。

魔王を倒す勇者の伝説、悪魔を鎮めた聖女の記録、迷宮に挑んだ盗賊の逸話。

自分を主人公に重ね合わせ、私は何度も、何度も冒険を楽しみました。

仲間と力を合わせ、困難を乗り越え、使命を果たす——なんて華麗なんでしょう！

ページをめくるたび、手は震え、心は痺れ、頭は馬鹿になりました。

特に好きなお話は、宝石のちりばめられた細身剣を凍と操るエルフ。

【至剣の姫】レイニーにまつわるお話。

竜の鱗を貫き、銀狼の群れをなぎ払い、吸血鬼の心臓を穿つ。

何百年と冒険を続けている彼女のお話は盛りだくさん。

でも私が憧れたのは、彼女が強くカッコよかったから、だけではありません。

「ハンナ。なにを読んでおるのじゃ？」

夢中になって本を読む私に、エメラルドの瞳をした金髪のエルフが声をかけてきます。

そう。【至剣の姫】レイニーその人です。

私の故郷は魔物に襲われ、滅びました。そこへたまたま通りかかったレイニーは、唯一生き残った赤ん坊——つまり私を見つけ、手ずから育ててくれたのです。

長命のエルフにとっては、十年なんて短いものかもしれません。

それでも私なんかのために、冒険の最前線を離れ、育児に専念してくれたのです。本当に感謝してもきれません。

「レイニーが邪悪な教団を討ち滅ぼす話を読んでいました」

「ああ、またか。まったく、誰がそなたにわらわの本など渡すのか……」

「本当はレイニーから直接、冒険譚を聞きたいんですけど」

「そ、そんな恥ずかしいことできるか！ 言っておくが、そこに書いてあることなど半分はデタラメで、半分は誇張じゃ。決して信じるではないぞ！」

物語のなかでは冷たく無愛想に描かれるレイニーですが、本物は温かくて、優しくくて、

おまけに照れ屋。大好きです。

でも、彼女を「お母さん」とは一度も呼べませんでした。

ずっと負い目があったんです。

彼女とは種族が違います。見た目が違います。能力が違います。

並んで歩いていても誰も母子だなんて思わないでしょう。

それでも、もし私が冒険者になれたなら、少しは近づけるのでしょうか。

「……レイニー。いつか私が冒険者になったら、仲間になってくれますか？」

訊ねると、レイニーは困ったように微笑みます。

「ハンナ。そなたは冒険者にならずともよい」

「な、なんでですか。私みたいな鈍くさいのに、冒険者は向いてない？」

「そうではない。かわいいハンナを危険な目に遭わせたくないからじゃ」

髪を撫でてくれるレイニー。なんだか気分がふわふわしますが、それでも私は食い下がります。

「じゃあ私が冒険者になったら、レイニーと一緒にいてください！ そうすれば、危険なことなんて全然ありませんよね！」

「……そうじゃな。そなたが冒険者になれたのなら、一緒に旅をするのも悪くない」

どうせなれるわけないし、適当に答えとけばいいや、という雰囲気ありでした。

でも、なにはともあれ言質はとりました。

これで憧れに憧れた【至剣の姫】と冒険できます！

もう約束しました！ 今さら嘘だとは言わせませんからね！

あとは冒険者になれさえすればいいんです。そんなの楽勝楽勝！

幼い私は、そんな風に思っていました。

さて……、時は流れ現在。

未来の英雄を育成する【ソルトラーク冒険者学園】の中庭です。

「ハンナ・ファルセット、ふざけるのはおやめなさい！」

細身剣で突きの練習をしていると、先生に注意されました。

「は、はい……」

「ほら、またふざける！ 先生を笑わせようとしなさい！」

どう弁明したらいいんだろうと思っていたら、同級生達がゲラゲラと笑いだしました。

「せんせー、ハンナは真面目にやってそれなんです！」

「万年レベルゼロの武器オンチですから！」

涙が出そうになり、思わず顔を伏せます。

「ハンナさん、本当に本気でやっているのですか？」

「……はい」

新任の先生だから知らなかったのでしょうか。

そう、私には剣の才能がてんでなかったのです。はたから見れば信じられないくらいに。

『道具は大切にするのじゃぞ。どんなものにも、神は宿っておるのだから』

別れ際にレイニーが残してくれた言葉です。

この世界には【道具レベル】というものが存在します。

羽根ペンのレベルが上がれば、書く速度が上がりが、文章も上手くなる。

包丁のレベルが上がれば、切れ味が増して、食べ物の鮮度を保てる。

魔法杖まほうぼうのレベルが上がれば、周囲の魔力を支配し、魔法を行使できる。

【道具レベル】が上がると、スキルを身につけられ、道具をより上手に扱えるようになります。さらには、筋力や知力といった、道具に関連する基礎能力も上げることができます。

されど、ハンナ・ファルセット。

十二歳でソルトトラーク冒険者学園に入園し、現在十四歳。

剣レベル、ゼロ。

二年間絶え間なく磨いてきた剣技は、お世辞にも上達したとは言えないものでした。

腰の引けた構え、ぶれる切っ先、へちまよこな突き。

モンスターどころか、虫も殺せないようなトロさです。

低い背にまとった田舎くさい服装も相まって、剣を振るう私ときたら本当にお粗末。

そんな自分が嫌で、毎日毎日、居残り練習を続けました。

しかしレベルは、ただの一度だって上がりませんでした。

剣の才能がないなら、せめて他の武器を使えるようになるうとも考えました。

けれど、槍やりも、斧おのも、魔法杖も、レベルはやっぱりゼロのまま。

武器を振るところか武器に振り回され、魔法の詠唱に成功したためしはありません。

「しょうがないわよ。だってドンケツ、ハンナだもの」

「万年ドンケツだと気楽だよなー。他人に追い抜かれる心配もないし」

「常に自分との戦いだもんね。ひゅー、かっこいいー！」

「うう……」

いつ頃からでしょう。憧れた【至剣の姫】とは対極の、不名誉なあだ名で呼ばれるようになったのは。

「ドンケツ！ ドンケツ！ ドンケツ！」

冒険者学園における最弱を意味する言葉。

「ドーンケツッ！ ドーンケツッ！ ドーンケツッ！ ド・ン・ケ・ツ・ハ・ン・ナ！」  
 呼ばれるたび、心は鈍く、光を失っていきます。  
 どーせ私は生きる価値のない、グズ中のグズ。ご飯を無駄に消費する豚さんです。  
 いえ、豚さんはおいしく食べられるために肥えているのです。単においしく食べて肥えるだけの私はそれ以下。とんだデブ女です。

でも、そんな私にだってプライドがあります。

どんなに泥だらけでみすばらしくても、夢は捨てたりしません。

冒険者にさえなれば、レイニーにまた会える。一緒に冒険できる。

そう信じなきゃ、やってられないじゃないですか。

「——これはなんの騒ぎだ」

そこへ現れたのは四十過ぎの、けれど筋骨隆々で衰えを感じさせない男性。

冒険者学園の理事長、バゼル・ソルトラーク。

「り、理事長。これはその……」

大権力者の登場に、うるたえる同級生達。どこから聞かれていたのかわからないので、  
 言い訳の仕方に悩んでいるようです。

「愚かな虫どもめ。貴様らは他人を馬鹿にできるほど強いのか？ 冒険ではひとつの慢心

が死に繋つながると言うのに」

「す、すみませんでした！ 以後、気をつけます！」

同級生達は一斉に頭を下げます。彼らの何人かは、お前のせいだとばかりに私を睨にらんで  
 きました。

普段なら萎縮してしまうところですが、私は理事長に庇かばつてもらえたことですから舞  
 上がりました。

だって、バゼル・ソルトラークと言えば【剣闘王】。【至剣の姫】とも対等に戦える、生  
 ける伝説です。

「貴様らはなぜこの学園にいる」

その問いかけに、姿勢を正す同級生達。

「はい！ 絶対的強者になるためです！」

「そうだ。では弱者を見下す行為は？」

「時間の無駄です！」

うむ、と腕を組む理事長。まるで誇り高いドラゴンのようです。

「あの……、ありがとうございます！」

理事長のおかげで、今後、露骨なイジメは減るかもしれません。

バゼル・ソルトラークに逆らおうなんて人、学園内はもちろん、冒険者の街ティアレットにはひとりもないんですから！」

「ふん、礼を言われる筋合いはない」

けれど理事長は優しさの欠片かけらもない瞳で、冷たく言い放ちます。

「貴様は退学だ。今すぐこの学園を出て行け」

「……………へ？」

あまりに唐突な宣告。しばらく私は、その意味を理解することができませんでした。

「あーあ、あいつ終わったな…………」

「理事長が決めたことは、この街では絶対だもんねえ」

「ま、当然だろ。ドンケツツハンナだし。今まで学園に残ってたのが奇跡なんだって」

同級生達が理事長には聞こえないくらいの声でクスクス笑います。

「ど、どうして退学なんですか？」

踵かかとを返して中庭を去ろうとする理事長に、慌てて食い下がりました。

「私、なんにも悪いことしていません！ それなのに、なんで！」

理事長はこれまでも「学園にふさわしくない」と、何人もの生徒を退学にしています。

でもそれは、授業をサボってたとか、先生の話を聞かなかったとか、そんな自業自得な

理由だと聞いていました。

なのに、なんで私？

「…………貴様は剣技だけでなく、脳みのうみずまでお粗末らしいな」

理事長はすがりつこうとした私を容赦なく蹴飛ばします。転倒したせいで背中を打ち、痛くてうめき声がもれました。

「伝統を守るためだ。この学園の卒業生は、これまで誰ひとりとして冒険者試験に落ちていない。なぜかわかるか？ 貴様のようなノミを、あらかじめ排除しているからだよ」

「ううう。そ、そんな…………」

ソルトラーク冒険者学園は、冒険者試験の合格率百パーセント。だから私のようなどんくさでも、授業についていけさえすれば、きつと夢を叶かえられると思っていたのに。

理事長はリボンで束ねた私の髪を掴むと、顔をのぞき込みながら冷徹に言います。

「それに弱者は周囲を腐らせる。一匹でもノミがいれば、他の虫けらは自分が強いと勘違いし、努力を怠る。これはもはや詐欺。他人の足を引っ張る鬼畜の所業よ」

「ひ、ひどいです！ 私だって頑張っているのに…………」

私は剣の練習を、他の生徒の三倍はこなしてきました。なのに、その努力をどうして頑張れない人達のために犠牲にしなきゃいけないんでしょう。

「なにも知らないくせに。私がどれだけ頑張ってきたか、見たこともないくせに……」  
 「頑張る？ 才能が伴わない努力などクソの役にも立たん。ノミが冒険者になれるなどと夢見たのが間違いだつたな」

私の髪から手を離すと、理事長はフンと鼻で笑います。

はらわたが煮えくり返りました。

「……撤回してください」

「なに？」

「才能がないのは認めます。でも、私の努力を簡単に否定したりしないでください！」

「ふん。□先でさえざる努力ほど、あてにならないものはないだろう」

「なら——私と勝負してください！」

勢い任せに叫んでから、はっと我に返りました。

無謀な、というか命知らずな挑戦——どう考えても自殺行為。

でも、もう後には引けません。

「【剣闘王】も随分と舐められたものだな」

理事長の太い眉が、みるみる吊り上がっていきます。

「オイオイオイ」

「死ぬわアイツ」

同級生達に言われなくてもわかっています。この決闘は、脚をプルプル震わせている生まれたての仔馬が、空を飛ぶベガサスを追いかけるようなもの。

でも、やるしかないじゃないですか。

学園に残るためには、憧れの冒険者になるためには、レイニーと冒険するためには——もうこれしかないんですから！

「私が弱者だからダメなんですよ。なら、強者なら文句ないはずです！」

「……確かに。だが、俺と戦えるとも思っているのなら、思い上がりも甚だしい——セシル」

「はっ」

理事長の後ろにびつたりとついていた少女が、一歩進み出ます。

理事長の娘にして学園首席、セシル・ソルトラーク。

腰まで伸びた青髪、切れ長の眼、高く通った鼻、すらりとした長身。銀色の胸当ては、からだの動きを束縛しないようにあつらえられた特注品。白いスカートとマントには汚れひとつありません。

レイニーのように凜々しくカッコいい子。

得意な武器が刺突に特化した細身剣などころも憧れの人を彷彿とさせます。

「このセシルと戦え。もし我が娘に剣を当てられたなら……、いや、かすめでもすれば、学園に残ることを許す」

「お父様も人が悪いですね。そんなことは方にひとつもありえません」

セシルが細身剣を抜くと、まわりの空気が歪んだように見えました。

ただでさえ長身の彼女が、余計に大きくなった気がします。

「ボクの速さには、もはや【至剣の姫】ですら追いつけない。決まり切ったことさ」

目の前にいるのは、私にないものをすべて持っている子。

こんな風になりたかった。せめて彼女と仲よくなれたら、地獄のような学園生活も天国に変わるんだろうな……。

いつもそんな妄想をしながら、セシルを遠目に見ていました。

なのに、その彼女が私に引導を渡す役？ そんなのってひどすぎます。

「このおー」

逃げ出したい気持ち懸命にこらえ、雄叫びとともに踏み込みました。

二年間の全てを込め、必死に剣を突き出します。

けれどセシルは淡泊な表情のまま、紙一重でかわしました。

パンツ！

顔面に衝撃が走り、目から火花が飛び散ります。

セシルが剣を持っていないほうの手で、私の頬をはたいたのです。

細身剣レベルが上がっても、筋力は大して上がりません。ただ、敏捷性は他の武器と比べて上昇率が段違い。

全武器レベルがゼロの私と比較したら、亀とウサギです。

「頑張り、ドンケツ！」

誰かが入れた茶々に、どっと笑いが起きました。心からのエールではありません。彼らにとって、私はただの道化なのです。

そりゃそうです。セシルは手にした細身剣を使ってすらいません。

いつでも倒せる、そう思って遊んでいるのです。

私が攻撃を繰り返すたび、彼女はカウンターで頬をはたきます。立ち向かう気力はじわじわと削がれ、逆に頬はどんどん膨れ上がっていきます。

勝てない。涙腺が緩んできて、視界がかすみそうです。

……私の夢は、ここで終わってしまうんですか？

こんなにあっさり、あっけなく……。

ぐわんぐわん揺れる脳裏に浮かんだのは、旅立っていくレイニーの後ろ姿でした。

『達者でな、ハンナ。次に会うことがあれば、そのときはわらわを母と呼んでおくれ』  
そのときまで考えたこともありませんでした。

レイニーがお母さんと呼んでもらいたがっていたなんて――

今、彼女は大陸の北、邪神ドルトスが支配する【魔の大地】で、冒険者として復帰し、大活躍しています。

エルフの時間感覚は人間とは違うので、待っていたら十年、二十年はあっという間。もしかしたら私が生きているうちには帰ってこないかもしれません。

もう一度会い、彼女をお母さんと呼ぶためには、私自身が冒険者となって【魔の大地】へと向かう他ないのです。

「わああああ！」

剣の様。

あなたが本当にどこかにいるのなら、今こそ振り向いてください。

今、この瞬間だけでも力を貸してくれたなら、恨み言はやめにしますから！

一撃で、一撃でいいんです。どれだけ不格好でもいい。

繊細な細身剣に似合わない叫びをあげ、私は身体ごとぶつかっていききました。

「――剣技【ウインドアリア】」

セシルが放ったそれは、皮肉にもレイニーの代名詞とも言える剣技でした。

憧れに憧れて、けれども決して放つことの叶わなかった技。

次に気づいたとき――私はすでに仰向けに倒れていました。

「ほらね。ドンケツがボクに触れようなんて無理。決まり切ったことさ」

頭上でセシルの勝ち誇った声が聞こえました。

息ができません。どうやら私は、セシルの剣から放たれた突風に吹き飛ばされ、地面に背中を強打したみたいです。

立ち上がれない。根性がどうかという次元でなく、身体が言うことをききません。

「……話にならないな。ノミ中のノミが。こんなグズが俺の学園に在籍していたことが腹立たしい」

理事長が無慈悲に踵を返します。

負け。惨敗。圧倒的敗北です。

「やっぱりこうなったかー」

「あつという間だったな」

「そもそも、勝負になつてないし」

「セシルに剣技を使わせただけいいじゃん」

「ばーか。それはお情けだろ」

同級生達のざわつきを先生がパンパン、と手を叩いて静めます。

「はい。授業はおしまいです。空模様も悪いですし、校舎に入りなさい！」

みんなの去っていく足音。もう私は、彼らにとつて同級生ですらありません。介抱する必要などない、ということです。

しばらくすると、雨が降ってきました。心身ともに打ちのめされた私は、しばらく立ち上がることができませんでした。

「剣の神様……。どうして私のことを愛してくれないんですか……」

涙があふれて、とまりませんでした。

悲しいというより、悔しい。悔しくてたまりませんでした。

自分があまりに無力で、情けなくて。

涙と雨が混じり、はたかれすぎた頬が痛くて仕方がなくなった私は、ようやく濡れそぼった身体を起こしました。

校舎に戻ると、扉の前に一枚の貼り紙がありました。

『本日付でハンナ・ファルセットを退学処分とする。退寮は一両日中に行うこと』

こうして私の夢は、あつげなく破れたのです。

\*

次の日。寮の自室を空っぽにして、ティアレットの街に出ました。

荷物は鞆ひとつ分の着替えと、たった150ペルの所持金。

それは三日の寝食で使い果たす金額です。

王国の冒険者支援制度のおかげで、学園にいるうちは食費の補助が受けられましたが、今日からはそれも当てにできません。

我が家のあるコーネル村までは馬車で二日かかり、支払いはちょうど150ペル。今ならぎりぎり帰れます。

「でも、退学になっただなんて、村のみんなに言えるわけありません……」

そんなことしたら、育ててくれたレイニーの顔にも泥を塗ることになります。

冒険者は無理でも、せめて一人前の大人になって帰りましょう。

そのためには、きちんとした職につかないと。

そう思って向かったのは、冒険者ギルドではなく、就職斡旋所。

この街での求人を手引きしているところです。

……が。

「さつそくですが、道具レベルを見せてください」

「は、はい……」

幹旋所のおばちゃんがあるので、仕方なく私は自らの能力をさらけ出します。

「ツリー・オープン」

そうつぶやくと、胸のあたりから枝分かれた木のような絵が飛び出して、空中に表示されます。

この世界の常識、レベルやスキルを一目で確認できる【スキルツリー】です。

木の枝のように見えるのは、無数に枝分かれたスキル。

身につけたスキルは光り輝くため、レベルが上がれば上がるほど木は大きく光って見えるのです。

ちなみにこの世界では、ただレベルが上がっただけでは能力値は変化しません。レベルアップと同時にもらえる【スキルポイント】を使い、スキルを身につけることで、初めて強くなれるのです。

だから、同じ剣レベル10の戦士がふたりいても、どんなスキルを習得するかで特性はまるで変わります。

【力持ち】のスキルで筋力を上げていけば重戦士になれますし、【軽業師】のスキルで敏捷性を高めれば軽戦士になれます。

なるべくなら万能型ではなく、似た系統のスキルを集めて特化型にしていくのが、早く強くなれる近道なんだそうです。

私には万能とか特化とか、まるで関係のない話ですが。

私のスキルツリーを目の当たりにしたおばちゃんが目尻が、ギョーンとつりあがります。「なんだいアンタ、なんのスキルも使えないじゃないか！」

「うううう、すみません……」

そうなのです。私がダメなのは武器だけじゃないんです。その他の道具もからつきし。普通の人は日常生活で道具を使っていれば「ピロント」という音とともに簡単にレベルが上がっていきます。そういうものなんです。

でも私は自分から発せられた「ピロント」を一度も聞いたことがありませんでした。

「アンタみたいな能なしに紹介できる仕事はないよ！ ダメな子を紹介したとあっちゃ、幹旋所の評判にも関わるんだからね！」

しっしっ、と手であっち行けされてしまいました。

「なにも仕事を紹介してもらえないなんて……。どうしよう……」  
街なかに佇み、途方にくれます。

幹旋所の貼り紙には『初心者歓迎』と書かれている募集もたくさんあったのに。こんなことなら「ただし才女に限る」と注意書きをつけておいてほしいです。

才女……。言われてみたいランキング三位には入る素晴らしい響きですね。ちなみに一位は「なんでもソツなくこなせるね」です。

私が行くと、あらゆることがソツだらけのソツかれさま状態になりますからね。そんな日々から、いつかはソツギョウしたいものです。

「今なら、まだ村には帰れるけど……」

確認のため腰に提げた布袋を指で探ると、なんだか硬貨が減ってる気が。

「……あれ？ 140ベルしかない!？」

そんなはずありません。寮を出るときは、確かに150ベル持っていたはず。

そして私は、自分のお馬鹿っぷりを呪いました。

手に、いつのまにか三本の肉串が握られています。

そうです。肉の焼ける匂いにつられて、つい購入してしまったのです。

嫌なことがあるとドカ食いしてしまう癖が、無意識に発動していたなんて……!

「もう、お家にも帰れません……」

ぐすんと鼻をすすりながら、串に残ったサイコロ肉を口に含みます。

……この串焼き、味付けが濃くておいしいですね。

うん、ここは物事を肯定的にとらえましょう。退路が絶たれば、命がけにもなれるっでもんです。こうなったらどんな仕事でも構いません。

宿屋、飲食店、道具屋。かたっぱしから仕事させてもらえないか聞いて回りました。

しかし、就職幹旋所を通してないと信用してくるところなんてありません。

たとえ好感触でも、スキルツリーで役に立たないことがモロバレです。

「お腹、空きました……」

あつというまに日々は過ぎ、ついにお金がなくなりました。

三日前から野宿、食事は二日前から井戸水だけ。燃費の悪い私にとっては拷問です。ぐるぐる、とお腹が鳴り続け、服も汗で臭ってきてます。

「これ以上みすばらしくなったら、本当に雇ってくれる人がいなくなっちゃいます……」  
困った私は、ついに教会に助けを求めることにしました。

このアガレスト大陸では、あらゆる道具に神様が宿ると考える多神教【聖道教】が栄えています。なかでもとびきり慈しみ深いのが【料理の女神】ファルマ様。

ファルマ様の教会なら、私のことも助けてくれるはず。ご飯も恵んでくれるはず！  
そう思ったのですが、辿り着いた高台の大聖堂は——なんと作りかけでした。

「な、なんで……?」

鍋を持つファルマ様の石像も、聖なる文様が刺繍された絨毯も、巡礼の旅を描いたステンドグラスもあります。

あるのは木造の骨組みだけ。絶望が胸を満たしますが、お腹はちつとも膨れません。  
こんな腹ゼロ分目状態で、今来た道を下りる気にはとてもなれないです。

「もう、いや……」

私は屋根すらない聖堂に入り、横になりました。

疲労と栄養不足で視界がぼんやりしてきます。

「疲れました……。なんだかとても眠いです……」

天使が迎えに来てくれるなら、ここで死ぬのも悪くありません……。

ああ。次に生を受けるなら、ちゃんとなにかの才能を持って生まれたいな……。

「——てめえ、行き倒れてんのか?」

ふいに声をかけられて、目を開きます。

まわりを見渡すと、三十代後半と思われる男性が柱に背を預けて立っていました。

「あ、あの……、あなたは司祭様ですか?」

疑問系になってしまったのは、その男性の顔があまりに厳めしく、身体も筋骨隆々だったからです。それを聞いた男性は、ふはっと愉快そうに笑います。

「てやんでえ。馬鹿言っちゃいけねえぜ。この大聖堂はこないだ火事で燃えちまってな。

今は作り直しの真つ最中。神様はもちろん、司祭様だっていねえ。救いを求めんならよそ行つた方がいいぜ、嬢ちゃん」

「そ、そうでしたか。すみません」

どうやら彼は大工さんだったようです。仕事の邪魔になつてはいけません。まして私がここで死んで、曰く付きの場所にするわけにはもつといきません。

私はよろよろと立ち上がると、その場を去ろうとしました。

「……待ちな」

すると、大工さんが私のことを呼び止めます。

「腹減つてんなら、飯くれーは食わせてやる」

「え、いいんですか!」

「あたぼうよ」

「あ、あたぼー?」

「当たり前前めって意味だ。これから教会を建て直そうってえヤツが、子どもを見捨ててちやバチが当たるとてもんよ」

大工さんは私を裏のほったて小屋に引つ張りました。なかにわんざといたのは、腕まくりをした体格のいい男性達。なんだかむわつとして、部屋の温度が外と全然違います。

「棟梁ちりやう、その子どうしたんスカ。まさか……隠し子？」

「べらぼうめ。俺は嫁さん一筋だ。ぶつ殺すぞ」

「そうだべお前。棟梁の血を引いてたら、こんなにめんこくなるはずがねえだ」

「……てめえら、そろって命が惜しくねえみてえだな」

どうやら最初に会った大工さんは偉い人みたいです。

彼は部下達を押しのけると、皿に温かなトマトのスープをよそい、その上にパンをのせてくれました。

口によだれがあふれてきて、食欲に任せてがつつきました。パンの食感はとも固かったですが、スープにひたすといい感じに味が染みこみます。

「神………神………！」

神様は大聖堂ではなく、ほったて小屋にいたんですね。

よそってもらった分を食べ終わっても、お腹の虫は鳴きやみません。

「おう、遠慮しねえでどんどん食え！」

私のお腹がぐうぐう鳴り続けているのを面白がって、大工さん達は器にどんどんよそってきます。

「ありがとうございます……。ありがとうございます……！」

嬉うれしくなつて一気にたいらげました。血液がトマトになるくらいスープを飲みまくり、お腹はパンでパンパンにふくらみました。

満たされて一息つくと、私は興奮気味に自分のことを大工さん達に語りました。

「みんなひどいんですよ……！ 私、頑張ったのに、全然認めてもらえなかったんです。ドンケツドンケツって、そりゃ鈍鈍さいいのはその通りですけど、もつと言い方があるじゃないですか！」

「そりゃー大変だったなあ」

「俺らも似たようなモンよ。つまはじき者しか、大工になんかならねえからな」

「大工と鍛冶は罪人の仕事って、昔っから決まっつからな。ああ、俺らは別に罪人じゃねえから安心しろよ」

「ま、なかには怪しいものいるけどな」

「わはははは！」

彼らはびっくりするくらい、私の愚痴に耳を傾けてくれました。嬉しかったです。誰かに辛さをわかってもらえる、ただそれだけのことが、本当に。

「嬢ちゃん。働き口がねえんだつたら、ここで雑用でもしてみるか？」棟梁がそう言い出したときには、思わず目を丸くしてしまいました。

「わ、私を雇ってくれるんですか？ 得意な道具なんてなにもないですよ？」

「あたぼうよ。レベルゼロでも、ゴミの片づけくらいはできんだろう？ 一応言っとくが給料は安いぞ」

言い方はぶっきらぼうですが、今の私にとってこれほど嬉しい提案はありません。

「私、精一杯働きます！ 役に立ちます！」

「期待はしてねえが、ま、頑張れや」

「ありがとうございます！」

深々と頭を下げ、棟梁の厚意に甘えます。

そしてせっかく働くからにはなんとか恩を返せる人間になろうと、そう誓ったのです。

\*

「ハンナちゃん！ この道具かたしといってくれる？」

「あ、はい！」

工事現場で雑用をはじめて一ヶ月。だんだん工事現場での仕事にも慣れてきました。

モットーは『人が面倒くさいと思うことをかたっぱしからやる』。

スキルがないならなりに、働き方はあるものです。

ノコギリで切り出された木材をまとめ、余った木屑を箒ではき、散らばっている道具を拭いて綺麗にする。

雑用中の雑用。でも、ひたすら地味なことを続けていたら、大工さん達も私を認めてくれるようになりました。

「ハンナちゃんが来てから、仕事が楽だわ。自分のことに集中できるっつーか」

「えへへ……」

学園ではどうしても作れなかった居場所が、完全男社会の工事現場で見つかるなんて、人生とは数奇なもの。

むさくるしくも愛しい、かけがえのない我が家です。

それにしても……、私は道具の手入れをしながら不思議な感覚に囚われていました。

……なぜか、大工さん達の持っているア、イが無性に欲しくなるのです。

傷だらけの、無骨な鉄製のハンマー。

ヤスリやノミには全く惹かれないのですが、妙にハンマーは手に馴染みます。剣や斧おのより軽いからでしょうか？

「全然、かわいくもカッコよくもないのに……」

ハンマーを見つめながら、ひとりごちます。

ゴツい、重たい、鉄臭い。こんなもののどこに惹かれてるんでしょう。

そういえば、ここに来るまでハンマーには一度も触ったことがありません。

——ハンマーは邪神ドルトスが司つかさどる道具。故に軽々しく手にするものではない。

そう教えられ、レイニーと過ごした村でもごく一部の男性しか持つことを許されていなかったのです。

「ハンナ。おめえ、釘打ちに興味でもあんのか？」

後ろから棟梁に声をかけられ、びくつとしました。

「あ、ええと……。そうなんです！ トンカンって、ちょっと楽しそうですね」

頑張つて取り繕いました。ハンマーそのものに惹かれている、だなんて、女の子としてどうなのでしょう。

いや、食いしん坊しんぱくすぎるとか、すでに変だとかいうツツコミは置いておいて……。

「なるほど。こんな仕事を面白がるとはな……」

棟梁はなにを思ったか、ちよいちよいと手招きすると、自分の腰掛けていた椅子に私を座らせませす。

目の前には、作りかけの書物棚。

棟梁は教会建築の息抜きに、余った木材で教会に置く家具を作っているのです。

「ほれ。釘を打ってみろ」

「い、いいんですか……？」

「あたぼうよ。これならミスしても、おおごとにはならねえ。棚が潰れても、ここの司祭が本の生き埋めになるだけだしな」

充分、おおごとな気がするんですけど……。と思いつつも、私は手にしているハンマーを振つてみたくて仕方ありませんでした。

左手に釘を持つと、余計にその誘惑にあらがえなくなります。

心臓がドキドキし、頬が熱くなります。

なんなんでしょう、この感じ。

初めて細身剣を持ったときさえ、こんなことにはならなかったのに。

釘を指でしっかりおさえると、おっかなびっくりでハンマーを振ります。

コン。木材に、釘が食い込みました。

「わ、まっすぐ刺さりました！」

当たり前、と思うかもしれませんが、私にしては超珍しいことです。

大体、新しいことに挑戦したときは予想の斜め上に行く大失敗をやらかすんですけど。

今回でいえば、自分の指を強打するくらいならまだまし。手をすっぽ抜けたハンマーが

搬入したばかりのステンドグラスを粉々にするとかまで行く可能性が大だったのです。

……今さら想像して恐ろしくなりました。才能がないって、怖い！

ピロン♪ 道具レベルが上がったとき特有の、甲高い音です。

「あれ？ 誰かレベル上がりました？」

振り返ると、棟梁がニヤリと笑いました。

「誰かって、嬢ちゃん以外にいねえだろ」

私は「ん？」と首を傾げたあと、くすりと笑い返します。

「まっさかあ。私これまで生きてきて、一度もレベルアップしたことないんですよ？ こ

んな簡単に上がるわけじゃないじゃないですかあ」

「……え？」

「え？」

「レベルが一度も、上がったことない……？」

うわあ、棟梁からの同情の眼差しが痛いです……。

目の前にスキルツリーが自動で展開します。経験するのは初めてですが、レベルアップ

時には勝手に開くんですよ。

まだなんのスキルも習得していないため、ツリーは相変わらず光を発していません。

けれど、下のほうには見慣れない文字が表示されています。

『新たに習得できるスキルがあります。スキルポイントを使いますか？』

こ、これは、マジでレベルが上がっていますよ。

レベルアップの音を聞きつけ、他の大工さん達も集まりだします。

「おっ、棟梁に釘打ちを習ってんのかよ」

「すぐにレベルが上がるなんて、嬢ちゃん大工の才能あるんじゃないか？」

「才能ある、ですか？ そんなこと、初めて言われました！」

なんかもう、じーんときました。こんな私にも、意外な才能が眠っていたのです。

だから私、ハンマーに惹かれたんですね。剣の神様にはそっぽ向かれた私ですが、ハン

マーの神様は私に振り向いてくれたようです。

……いやハンマーの神様って、邪神ドルトスじゃないですか！

「ふっ、まあハンマーのレベルは比較的上がりやすいって言われてるんだけどな。俺も初めて釘打ったときはレベルが上がったし」

「そ、そうですね。ツリー・オーブン」

空中にスキルツリーが投影されます。まだスキルは習得していないためツリーは光っていませんでしたが、その下に見慣れない文字がちょこんと表示されていました。

……………【鈍器レベル】と。

「——ぶっ。鈍器ってなんだよ！」

「ハンマーレベルじゃないんかい！ 鈍器、鈍器で！」

「ぎゃははははは！」

みんなが腹を抱えて爆笑するので、途端に恥ずかしくなりました。

「なにがおかしいんですか！ 同じようなものでしょう？ ハンマーと鈍器って！」

「いや、鈍器レベルなんて表示、見たことねえから！」

「くくりがおおざっぱ！ ハンナらしいべ！」

あんまりみんなが馬鹿にするものだから、私は頬を盛大に膨らませました。

「ぶー。いいですよ。鈍器、どうせ鈍い私にはびったりですよね」

「べらぼうめ。ふてくされてんじゃねえよ。レベルが上がったことじゃ変わりねえ。才能

が見つかってよかったじゃねえか」

笑いをこらえながら頭を撫でてくる棟梁とうりやうを無視して、私は釘を打ちます。

みんな、結局私を馬鹿にするんですから。もう知りません。

コン。ピロン♪

「ま、中途半端な才能なんて、あっても苦しむだけかもしれないねえがな……」

カン。ピロン♪

「中途半端な才の……」

カーン。ピロン♪

「半端な才……」

カン、カン、カン。

ピロン、ピロン、ピロン♪

「才……能……?」

まるで輪唱みたいに、釘を打つとレベルアップ音が鳴り響きます。

私は完全に動揺していました。

なにが起きているんでしょうか。

これまで一度もレベルが上がったことないからピンと来ませんが、いくらなんでも、こ

んなに立て続けに上がることって普通ありえないですよね……？  
ワケわかんなくなっちゃったせいで手が止まりませんでした。

私は棟梁に渡された釘を打ち終わると、次の釘を手に取ります。  
カカン、カン、カン。

ピロロロロロロ——♪

みんながざわつきましたのに、そう時間はかかりませんでした。

「な、なあ。お前ってさあ……、ハンマーのレベルいくつよ？」

「五年大工やって、ようやく30ってとこ……」

「お、俺は十年やって50だ」

「棟梁でさえ80くらいだったろ。こんな勢いでレベルが上がるやつなんて——」

「「見たことない！」」」

鈍ッ!!

それからというものの、私の仕事内容は一変しました。釘を打つ作業は全部私が担当することになったのです。



「ハンナちゃん、ここ打ってくれ！」

「はーい！ わかりました！」

カーン！

鈍器レベルが百を超え、スキルを身につけた私は、長い釘でも一撃で根元まで木材に刺し込めるようになりました。まるで吸い込まれるように釘がすっぽり埋まるのです。自分でやっても気持ちいいくらいに。

「ハンナさん、椅子組み立ててみてください！」

「はーい！ 了解です！」

ピロン♪ ピロン♪ ピロン♪ ピロン♪

鈍器レベルはハンマーを振るたびに上がり、磨くたびに上がり、あげくの果てには胸に抱えて寝るだけで上がるようになりました。

レベルが千を超えたときに、レベルアップ音をミュートできるスキルを覚えていなくなったら、私は不眠症に悩まされていたと思います。

「ハンナ先生。大聖堂の屋根、お願いします！」

「はーい！ 先生はやめてください！」

レベルはあっさり万を超え、それでもなお、上がり続けていきました。

\*

「いやー、教会の完成も間近ですね！ ハンナ先生のおかげで！」

「私のおかげって……。進捗が早まっているのは、皆さんが頑張っているからですよ？」

「またまたあ、先生は口が上手いんだから」

「だから、先生はやめてください！」

工事現場に流れ着いてから、一年近くが経ちました。

先生というあだ名も、敬語も、最初は冗談半分だったのに、大工さん達はもう当たり前みたいに使っています。そしてぎらついた眼差しを向けてきます。

それは女の子ではなく、尊敬する『匠』に対するもの。

彼らが盗もうとしているのは乙女心などでは決してなく、私の技術。

なんででしょう。この誇らしくも、そこはかとなく感じてしまう敗北感は……。

初め再建に五年はかかると言われていた教会は、ほぼ完成しています。

工期が五分の一にも短縮されたのは……。まあ私の影響、ありますよね。どう謙遜してもこれは認めざるを得ないです。普通だったらありえないスピードなんですから。

「ハンナ先生、教会ができあがっても、次の現場で一緒に働きましょうね！」  
「そうですね。この仕事は大好きですし、頑張りたいです」

大工さん達に返事をしながらも、実は将来設計に悩んでいました。鈍器レベルが百万を超えた頃から、考えるようになったんです。これだけレベルが上がれば、冒険者としても通用するんじゃないかなって……。

「お前ら、喋っている暇があったら働け！」

そう怒鳴りつけてくるのは現場監督さんです。

病的に目つきが悪くて前髪の薄い、悪人顔の中年男性ですが、この街の役人で偉い人らしく、大聖堂にもちよくちよくやってきては、大工さん達に文句を言います。

「なんでえ。ハンナ先生のおかげで工期はめちゃくちゃ早まっているのに……」

大工さん達は監督さんが嫌いです。もちろん私も。

その理由は、彼が口やかましいからだけではありません。

「まったく、黙って仕事することすらでいいのか。これだから邪教徒どもは……」

親指の爪を噛みながら監督さんがぼやきます。大工、鍛冶仕事に従事する者は邪神ドルトスを崇める邪教徒——そう罵られることは少なくありません。

なぜなら、邪神ドルトスはハンマーなどの鈍器を司る神でもあるからです。

「偏見ですよ。ハンマーを使っているだけで邪神を崇拜しているだなんて」

私は近くにいた棟梁にこそっと耳打ちします。

「大体、本当に邪教徒だと思ふのなら、ファルマ様の大聖堂を建てさせようなんて思わないでほしいです」

「まったくだな。でもまあ、俺は別にドルトスを悪く思っちゃいねえがな」

「え？ でも、ドルトスは悪い神様じゃないですか。神々戦争で他の神様を殺しまくった破壊の神だって……」

「べらぼうめ。それこそ偏見じゃねえのか？ 俺も嬢ちゃんも、神話の時代には生きちゃいねえ。自分で見たわけでもねえんだからよ」

「それは……、そうかもしれないですけど……」

「そもそも鈍器を司る神様が破壊の神だなんて、俺は信じちゃいねーんだ。だって、全然逆じゃねえか。俺達はハンマーで物を削ってんだからな！」

ぐうの音も出ませんでした。神話を疑うなんて、考えたこともなかったです。大工仕事を手伝うようになって、本当に勉強させられることばかりです。

朝。教会の外に出て、ハンマーで木の板をコツンと叩きます。

## 「鈍器スキル【足場固め】」

すると板はひとりでにふわりと浮き上がり、外壁にそって階段を形作ります。みんなが外壁作業をしやすいよう、外の足場を用意するのは日課のひとつ。

普通なら一日がかりな準備も、スキルを使えばあっという間で。

鈍器スキルは多種多様で千差万別。工夫次第では戦闘にも充分応用できるはず……。

でも、大工としての暮らしが心地よくなっているのも確かなのです。

みんな気がいい人達ですし、肉体労働した後のごはんはおいしいです。

しかも現場の食事はジュースでポリューミー。

焼き肉の日は、ライス十杯はいけます！

……うわ。これじゃ夢より食欲を選んでるみたいじゃないですか！

さすがにマズいです。ごはんだけに。いえ、ごはんはウマいです。

さて、夕方になると私は工事現場の高台を離れ、街へと向かいます。棟梁の奥さんに、鍛冶を教えてもらうためです。

棟梁にはもったいないくらい美人な奥さんは、大工さんの道具や、釘、蝶番を主に作っている鍛冶師さん。たまに冒険者向けに剣なんかも打っています。

鍛冶でもハンマーは大活躍。鈍器スキルをより磨き上げるには弟子入りしておくべき、

と棟梁が将来を考えて弟子入りさせてくれたんです。

鍛冶はとても楽しいです。

私の場合、鈍器レベルが高すぎるのが災いして、ちゃんと習っているのに我流みたいに なってしまい、師匠からは「邪道！」と罵られてばかりですけどね。

まあ、仕方ないです。

鉄塊をコンとひと叩きましたら、ひとりでにドアノブの形になっちゃいました……なんて、 やったのが自分じゃなきゃ「反則反則！」と叫びだしちゃうところですよ。

「——このアマ！ ふざけやがって！」

「あたいにもプライドってもんがある。そんな金じゃ剣は渡せないよ」

鍛冶場につくと、入り口で師匠と客が言い争っていました。

どうやら師匠の打った剣を買おうとした冒険者と、金額でもめているようなのです。

「ハンマーで適当に剣を打っただけで、2千ベルもとるだとお……。さすが邪教徒、がめ ついもんだな！ ほら、そんなにほしいならくれてやる！」

強面の冒険者は革袋に入っていた硬貨を地面にぶちまけます。

「な、なんてことするんですか！」

思わず駆け寄り、冒険者に食ってかかります。

「ああ、なんだお前は」

「いくらなんでもひどすぎます。お金と食べ物粗末にしたらいけません！」

「ハンナ。相手にするんじゃないよ。あたいらハンマーを使う職人の立場が弱いのは、今に始まったことじゃないさ」

かがんで、地面に散らばった硬貨を集めはじめた師匠。

私の尊敬する人が、どうしてこんな扱いを受けなきゃならないんでしょう？

「はっ。ろくな剣を作れないくせに、デカイ態度を取るからだ。邪教徒は邪教徒らしく、頭を下げて生きてかなきゃなあ？」

冒険者はニヤリと勝ち誇ったように笑い——なんと師匠の頭を踏みつけました！

「あなたねえ！」

私はカツとなり、冒険者を突き飛ばしました。そして、腰に提げていた小さなハンマーを握りしめます。

「ハンナ！」

師匠が声をあげますが、もう誰にも止められませんか。

「なんだあ？ そのちっぽけなハンマーで俺とやろうつてののか？」

「あたぼーです！」

棟梁とうりょうの口癖くぐせを真似まねてすごんでやります。

すると冒険者は対抗し、師匠から買った剣を抜きます。切っ先から根元の鏢くわまで、刃がさらさら光り輝いて見えます。さすが師匠、素晴らしい出来映え。

「それだけすごい剣を作ってもらって、感謝すらできないなんて。みじめな感性ですね」「ふん。この剣のどこがすごいって？ 俺の手には全然なじんでないぞ！」

叫びながら、冒険者は筋肉の隆起した腕を持ち上げます。握った剣の刃は、きつちりとこちらを向いています。

峰打ちなんて、微塵みじんもする気はないようです。

「剣が手になじんでない、ですか。じゃあ剣以外の装備は、よほど身体からだになじんでるんでしょうね？」

カーン！ 私は男の剣をかわすと、ハンマーで男の着ている鎧よろいを叩きました。

「はっ！ なんだその攻撃は。鎧よろいこしじゃ痛くも痒かゆくもないぜ！」

実際、その通りだったでしょう。別にダメージを与えようとしてないですから。

「……鈍技どんぎ【オーダーメイド】」

「ああ？ ……ぐ、ぐわああああー！」

悲鳴を上げる冒険者。無理ありません。着ていた鎧よろいがぎゅっと縮まって、身体を締め

つけはじめたのですから。

「うわ、本当ですね。その鎧、すごく身体になじんでるじゃないですか。もう一生脱げないんじゃないかってくらいに」

「て、てめエー！ なにをした！」

「なにって？ あなたが嘘つきにならないよう、鎧のサイズを合わせてあげたんですよ。でも大変ですね？ はやく脱がないと、どんどん鎧が縮んで、身体がべちゃんこになってしまうかもしれません」

「な、なんだって……？」

冒険者は頑張って留め具を外そうとしますが、ぎつちぎちに締めつけられた状態で器用に手を動かせるわけありません。

「かわいそうですね。いっそ、ひと思いに私がべちゃんこにしてあげましょうか！」

鈍ッ！

ハンマーを地面に叩きつけると、石畳がひび割れ、円形に陥没しました。

スキルなんて使ってません。単純に腕力によるものです。

「ひ、ひいいい！」

強面の冒険者は剣を地面に放り投げ、情けない声とともに逃げ去っていききました。

素直に謝れば鎧を元に戻してあげようと思っていたのですが、まあ、いい気味です。

……とか思っていたら、頭の上にゴツン、と拳骨が降ってきました！

「こら、ハンナ！ 軒先の道をこんなにしちまつて！」

「あつ！ ご、ごめんなさい！」

ノリと勢いでやってしまいました。よく考えたらそうでした！

ここ、店の前じゃないですか！ こんな落とし穴みたいなものがあるのなら、お客さんが寄りつかなくなってしまうます！

けれど、師匠は怒った表情をふつと緩め、拳骨した場所を優しく撫でてくれます。

「ま、でも久しぶりにスカッとしたよ。ありがとね」

「えへ」

「もちろんこのへこんだ地面は、あんたが直すのよね？」

「えへへ……。はい……」

やっぱり師匠、怖いです。これがアメとムチですか。アメ1にムチ2って感じですね。

「それにしても、冒険者ってあんな人はっかりなんでしょっか……」

私はごまあみろという気持ち以外に、ちょっと複雑な思いを抱いていました。  
「レイニーは『弱い人、虐げられている人を助けるのが冒険者』だと言っていました……。  
なのに、今の人は完全に真逆じゃありませんか」

いいえ、さっきの冒険者だけじゃありません。

私を学園から追い出した理事長、『剣闘王』バゼル。娘のセシル。

将来冒険者になる私の同級生達。

みんながみんな、虐げられている人を助けるどころか、喜んで虐げるような人ばかり。  
だとしたら、今みたいなことはきつとこれからも起こり続けるのでしょうか。

「なんでえ、なにかあったのか？」

そこへ師匠の旦那さん、棟梁が帰ってきました。丁度いいと私は思いました。ずっと前から  
私もやつっていた思いが、ついに固まったように感じたからです。

「棟梁、師匠。決めました。私、やっぱり冒険者になります」

そう宣言すると、棟梁はすつと目を細めました。

「いつか話していた、親代わりをしてくれたエルフに会いに行くのか？」

「それもあります。でも、それだけじゃありません」

私は、胸の内をぶちまけます。

「私、素晴らしい職人の皆さんが、鈍器を使っているってだけで虐げられているのが我慢  
なりません。だから私は——虐げられている人達の象徴、鈍器を使う冒険者になります。  
そしてみんなに思い知らせてやるんです。鈍器の素晴らしさを。そして、誰かが誰かを虐  
げることが、どれだけ馬鹿みたいかを！」

それは真正正銘の、私の本音でした。私にできること、そして私にしかできないことを  
やって、胸を張ってレイニーに会いに行くのです。

「急だねえ。まあ、いつかはこういう日が来るんじゃないかって思ってたけどね」

師匠は寂しげに眉を歪めます。

一方の棟梁は、ふう、とため息をつき、くるりと背中を向けました。

「出て行くのは大聖堂が建ってからにしろ。ひとつデカいものを完成させたっていう自信  
は、必ずお前の財産になる」

「……はい」

「完成まで、あと二週間ってところか。米を炊く量が減るな……」

どういふ感慨の仕方ですかと憤慨したいところですが、私は天を仰ぐ棟梁に深く頭を下  
げました。棟梁に助けてもらわなければ、私はきつと鈍器に出会うこともなく、空腹での  
たれ死んでいたでしょう。

恩は一生かけても返しきれないほどあります。それでも、決めたのです。私は、私の生きる道を。

\*

大工さん達とのお別れは、すぐにやってきました。

木造建築の美しい教会、ティアレット大聖堂が完成したのです。

荘厳な屋根。丈夫な外壁。豪華なステンドグラス。どこをとっても完璧な仕上がりで、この建築に自分が携わったのだと思うと、誇らしい気持ちが生じわると胸にあふれます。

「先生もつたいないですよ。このまま大工を続けるべきですって。冒険者はカッコつけばかり。鈍器レベルが高くて、剣や魔法を使うやつらに絶対馬鹿にされるんですから」名残惜しそうな大工さん達に、私は頭を下げます。

「ごめんなさい。それでも、私は冒険者になるって決めたんです」

「で、でもせんせえ……」

「グズグズ言うのはやめねえかお前ら。みつともねえ！」

「棟梁……」

「最後くれえ、気持ちよく送り出してやろうじゃねえか。それによ、俺は見えてみてえんだよ。ハンナの鈍器が、冒険者としてどこまで通用するのかわ」

棟梁はパチンと指を鳴らします。それを合図に、大工さん達が布に覆われた、なにやら重そうなものを運んできました。

「餞別だ。持つてけ」

布をはぎとると、現れたのは大小ふたつのハンマーでした。

小ぶりなほうは、腹は平たく、背は爪になっている、いわゆるネイルハンマー。片手で持てるので、釘を打つのにあつかいにも活躍しそうです。

大きなほうは、柄の長い両手持ちのハンマー。

金属部は大人の胴体よりもぶっとくて、竜の頭でさえも一撃で砕けそう。

ちっちゃな私を持つと、遠近法がおかしくなつたみたいです。

「これってもしかして……?」

「ああ。嫁さんが作った特注品だ。きっと過酷な冒険にも耐えられるだろう」

「……師匠」

今日はお別れに来てくれていませんが、こんなに素敵なプレゼントをもらえるなんて。

感動の涙をぐつとこらえ、私は宣言しました。

「……行ってきます。冒険者業界に、鈍器のすごさを知らしめてやります！」

「あたぼうよおー！ 先生ならできる！」

「鈍器を使いこなす先生こそ、漢おとこのなかの漢ですぜ！」

なんだか不本意なエールまで受けてしまってますが……、気にしません。

大ハンマーを背に負い、小ハンマーを腰のベルトに提げると、私は大聖堂をあとにしました。

目指すはそう、憧れの冒険者ギルドです！

カララン。

ギルドに入ると、扉際に陣取るパーティがじろりと睨にらんできました。

テーブルは六人掛けが四に、四人掛けが六、脚の長い立ち飲み用が五つあり、その多くを冒険者達が囲んでいます。

「う、ううむ……」

さっきまでの威勢はどこへやら、私は思いつきり気後れしました。

分厚い鉄鎧の重戦士。櫛かの杖ぼうを持つエルフの魔術師。黒髭くろひげをたくわえたドワーフ。自前

のナイフでリングをむくのは盗賊さんでしょうか。

誰も彼も歴戦の勇士つばくて、カッコいい人達ばかり。

明らかに私、浮いています。そりやそうですよね……。冒険者なら、みんな剣か魔法を使いたいでもん。次点で槍やりか弓。せめて斧おの。

「ねえ、あれ見て」

「ダッサ、ハンマーなんか担いでやがる」

カアアア、と頬が熱くなりました！

そう。大工文化にどっぷり染まっていた私は、すっかり忘れていたのです。

神話だのなんだのとは関係なく、鈍器はダサイ。

その決して覆すことのできない世界の真理を……！

「いらつしやい。見ない顔ね。新人さん？」

入り口で固まっている私に声をかけてくれたのは、カウンター奥に座る受付のお姉さんでした。たれ目の眉に紫のアイシャドウをつけた、なんとも艶なまめかしい大人の女性です。

「ハンナ・ファルセット。ほ、冒険者志望です！」

ガツガチな自己紹介を聞いて、クスクス、と近くにいた冒険者の先輩が笑います。

ああ、私ってなんでもいつも笑いの対象になってしまうんでしょうか。

「そ。じゃあこの紙に必要事項書いてね」

お姉さんは慣れた手つきでペンと登録用紙を渡してきます。目立ちたくなくていそいそと書き出そうとした私ですが、紙を押さえた瞬間、ちよつとよろけました。

あれ？

このカウンターテーブル、ぐらついています。

慣れれば気にならない程度ではありますが、経年劣化で接合部が緩んでいるようです。

安定感がなくて書きにくい。私は無意識に腰のベルトから小ハンマーを抜くと、カウンターをカツンと叩いていました。

「ちよつとあなた。なにしているの？ 傷つけたら弁償してもらおうわよ！」

お姉さんのたれ気味の目尻が上がります。

「あ。勝手にすいません。ぐらついていたから、直したんです」

「はあ？ 確かにこのカウンターはガタついてたけど、そんな適当に叩いて直るわけが

……」

ぐつぐつと、自分の体重をカウンターに載せたお姉さんは、怪訝けげんな表情になりました。

「……直ってるわ。一体、どうやったの？」

「机の神様が怠けてたんで、起こしたんです」

「は？」

「だから、テーブルの神様が怠けてたんで、ハンマーで叩き起こしたんです。気を引き締めるついでに、木を引き締めてもらいました」

「……………はあ？」

「あ……」

やってしまいました。得意気に語ってしまいましたが、よく考えたらこんな話、わかるわけではないですね。

物には神様が宿っている。それは常識ですが、その姿を見たり、声を聞いたりできる人はいません。たまに見えると主張する人もいますが、ほぼ間違いなくペテン師です。

でも、鈍器レベルが1千万を超えたあたりから、私には見えるようになってしまったのです。いろんな道具に宿る神様が。

昔、神様は道具には宿っておらず、人間を見下ろせる天界に住んでいたそうです。

ところが鈍器おとぎを司る神、邪神ドルトスは人間を滅ぼし、地上を我が物にしようと思てました。その野望を実現するために反対する他の神を次々と殺していったのです。

もちろん、標的とされた神様は結束し、ドルトスを倒そうとしました。

血で血を洗う【神々戦争】の始まりです。

しかし、ドルトスは圧倒的に強く、最終的に自分以外の神様を全て殺してしまいます。鈍器でぐつちやぐちやにされた神々。でも地上に降り注いだ血肉には少しづつ神様の魂が宿っていて、それは自らが司っていた道具にとりついたので。

勝利したドルトスもまた、無傷では済みませんでした。

彼の血肉もまた、地上に降り鈍器に宿ったと言われています。けれど他の神様と違い、ドルトスの本体はまだ生きています。

なんでも【魔の大地】の最北端で、今も眠りについているのだとか。

道具にとりついた神様の姿は——半透明の小人といえはわかってもらえるでしょうか。

外見や年齢は様々で、このカウンターテーブルに宿る神様は髭の長い、村の長老みたいに見えます。

私が出来たときはドラドラと寝転がっていましたが、ハンマーで叩いたらシャキッと正座してくれました。なかなか可愛いおじいちゃんです。

「ええと。つまりあなたは、魔法使いなの？」

不思議そうに訊ねてくる受付のお姉さん。

魔法使い。なんともカッコいいですが、鈍器で叩き起こしたり、叩き直したりする乱暴なやり方しかできない私に、そんな高尚な名乗りは許されません。

「いいえ、強いて言うなら——鈍器使いです」

「なるほど。鈍器ね、鈍器。……………鈍器？」

お姉さんがおずおずと、私の持っているハンマーを指差します。

「鈍器って……、そういう？」

「はい。これを武器として使います」

「マ、マスター」

お姉さんは近くを通りかかったおじさんと呼びとめます。

ギルドマスターでしょうか。長身で精悍な、いかにも元戦士といった風貌の人です。

「ね、ねえ。ハンマーって、武器扱いでいいの？ 大工用品じゃなくて？」

「うん？ 東のほうじゃ武器として使う地域もあるらしいが……。ここらじゃあんまり見ないな」

マスターは私が背負っているドアカイハンマーをじろりと見やります。

「それ、振り回せるのか？ アンタの体格には合っていないように見えるんだが」

「大丈夫です。鈍器のレベルだけは高いので！」

私の取り柄といったそれくらいなのです。しかし、受付のお姉さんとマスターはまだ信じられないといった様子。

「とりあえず、スキルツリーを見せてくれる？」

それは私も望むところです。以前ならレベルゼロを知られるのが嫌でためらっていたところですが、今はまったく気になりません。

「ツリー・オープン！」

かけ声に応じて表示されるツリー。それをひと目見て、お姉さんは目を丸くします。

「ま、マスター。なんか表示が変なんだけど」

「ん、なんだこれは……」

ふたりの反応に、苦笑せざるを得ませんでした。

そりゃそうですよね。ふたりの前にあるのは、信じられないくらい無数に枝分かれしたスキルツリー。

さらに、馬鹿馬鹿しいほど膨れあがったレベル表示です。

『鈍器レベル 105、224、578』

つまり、およそ1億。

私、どうやら鈍器の神様に死ぬほど愛されているみたいです。

ちなみに、鈍器の神様は熊の姿。

手足の短い、愛らしい姿で、私の二振りのハンマーにも、一匹ずつ宿ってます。

サイズが違うので、見比べると親子熊みたいです。

これ、やっぱり邪神ドルトスの血肉から生まれた神様なんですかね？

邪神にルーツがあるにしているのはやたら可愛いですし、どっちも目の焦点が微妙に合っていて、すごく馬鹿っぽいです。邪悪な気配は全然しません。

やっぱり神話なんて、棟梁（ちやうりやう）の言うとおりあんまりアテにならないものなのかも。

マスターは確認と称して私にツリーを何度も出し直させましたが、結果は同じ。

「ふむ。こんなことは初めてだ。仕方ないからこのおかしい表示は無視して、試験を受けてもらおうでしょう」

うーん……、やっぱり信じてもらえませんでした。

本来なら武器レベルが50を超えていれば、試験は免除になるんですが……。

まあ仕方ないですよ。そもそも鈍器が武器と認められるかも怪しかったわけですし。

「ちようどよかった。これから一斉試験があるのよ。それに参加してもらえない？」

「一斉試験？」

「ええ。ソルトラーク冒険者学園の生徒さんが、そろそろ来るはずだから」

「え」

……こんな最悪の間ってあるでしょうか。

そういえばもう季節は春。私を馬鹿にしてきた同級生達が卒業を迎える時期です。うわー、会いたくない！

そくさとその場を立ち去ろうとしましたが、時すでに遅し。「まったく、ヤダヤダ、超ダルーい。あとレベルがひとつ上がつてれば、こんな試験やなくてよかったのにさあ」

扉の聞く音とともに、キンキンと耳障りな声が聞こえてきます。

魔術師志望のローゼリア・シュルトツ。

いつも先陣を切って私を馬鹿にしてきた女ダークエルフでした。

『ヤダヤダ、ヤッバーい☆ 魔術師志望のアタシより剣が下手なんて、ハンナってばただけどんくさいのオー？』

ローゼリアは、学園でしつこく私をからかってきました。

ダークエルフは今でこそ友好的ですが、三百年前までは人間とガツチガチに敵対していた種族。

人を傷つける癖が、遺伝子レベルで刻み込まれているのかもしれない。

ド派手なピンクの髪に、ダークエルフラしさ全開の褐色肌。

腕にはヒラヒラとした踊り子のような布を纏わせ、脚はニーソックスで隠しているくせ

に、肝心の胴体には下着かっくら露出の多い服しか着ていません。

極めつけはジュエリーのストラップがジャラジャラついた魔法杖。

とにかくチャラくて、流行に振り回されまくる彼女こそ——私の学園生活を振り回したまくった張本人でした。

剣の下手さを馬鹿にするだけならまだ事実だから許せます。

が、彼女はそれだけに留まらず、練習中に足をひっかけてきたり、魔法で私の動きを遅くしたりして、みんなの笑いを誘っていたのです。

私がトロ口とか、ノロマとか言われてた理由の半分は、彼女にあると思います。

まあ残り半分は、完全に私自身のせいなのですが……。

「試験とかやんなくてよくなーい？ なんてレベルが1足りないだけで受けなきゃダメなのカナあ。どうせゴーカクするに決まってるのに」

「まあまあ、学園卒業時点でレベル50を超えてる人なんて、学年にひとりいれればいいほうなんだからさ」

「在学中にレベル100まで行っちゃうセシルが異常なだけだね。ローゼほどの実力者が次席に留まっているとか、うちの世代、どんだけ黄金世代なのよ」

ローゼリアだけじゃありません。私の苦手な同級生がわんさとギルドに入ってきます。

ソルトトラック冒険者学園には王国中から生徒が集まり、卒業後は再び各地に散らばります。だから、ここティアレットに残るのは一割に満たないはずなのですが……、それでも十人以上いるみたいです。

いやああああ……。

私は彼女らに背を向けてちこまりました。どうかバレませんように……！

しかし、その願いは受付のお姉さんが発した一言であっけなく碎かれます。

「今日の試験、飛び入りでその子も受けることになったの。仲よくしてあげてね」

それを聞いて、ローゼリアがこちらに視線を向けます。さっと顔をそらす私。

「へー。学園出身じゃない子なんかいるんだ？ ……って、なんかダツサイ武器しよってうう、いきなりあおられました。」

ローゼリア、こういうところ全然変わってません……！

学園での嫌な思い出がどんだんフラッシュバックして、胃がキリキリと痛みます。

「……ん？ ンんんん？」

背を向けている私の肩を掴み、顔をのぞきこんでくるローゼリア。

必死で身体ごと顔を背けますが、しつこく追いかけてくるのです。

「うわ、誰かと思えばドンケツハンナじゃん！ ひつさしぶりー！」

「お、お久しぶりです。ローゼリア」

「まだ冒険者になるのあきらめてなかったんだねー！ ヤダヤダ、ヤツバーい☆ 超ウケるんですケドー！ 武器の才能はなくても、人を笑わせる才能だけはバッチリじゃーん！ あ、ゴメン。人に笑われる才能の間違いだったー！」

ムカムカムカー！

「べ、別にいいでしょう？ いつまで冒険者を目指そうが、私の勝手ですー！」

「いやあ、どう考えても無理っしょー。なんで学園追い出されたか、覚えてないのお？

ど・ん・く・さ・い・か・ら・だ・ゾ？」

指で私の頬をぐりぐりしながら、ウインクしてくるローゼリア。血管がプチ切れそうになります。この的確に相手の逆鱗さかざねに触れてくる能力、もはや才能ですよ。

絶対、彼女は魔術師より前線の壁役かき役をやるべきです。ヘイトを稼ぎまくるから、魔物の攻撃もきつと自然と集まるはずですよ。

そして同級生達の中には——私が一番会いたくなかった子まで混じっていました。

「——キミはもしかして、ハンナ・ファルセットか……？？」

「セシル・ソルトトラック……！」

悔しいことに、彼女は一年前より、さらにカッコよくなってきました。  
長い青髪、鋭い目尻、体軀にびったり合った胸当て。  
腰に提げた細身剣の柄に手を添えた立ち姿は堂々としたものです。  
というか絶対、彼女って【至剣の姫】レイニーを意識してますよね。  
もし意識せずにこんなに似てるんだったらそれこそずるいです。  
私なんて、意識しまくってもひとつも似せることができなかったのに……。  
憎むべき相手ではありませんが、あまりに綺麗で目が離せません。  
ぐぬぬ……。

「未練たらしいな。雰囲気を味わって満足したのなら、さっさと出ていくんだね。ここは  
キミのようなレベルゼロが来るべき場所じゃない。決まり切ったことさ」  
セシルは私を睨みつけながら言います。

一年間、工事現場にいた私にさえ、彼女の武勇伝は届いてきました。  
弱冠十五歳にして、ティアレット最強の剣士と噂され、次代の勇者と称えられる彼女。  
でも、それがなんだというのでしょうか。

ここは彼女の父が理事長を務める学園のなかじゃありません。  
ひとつたび学園の外に出たなら、彼女もまた一介の冒険者に過ぎないのです。



ちよつと腕が立って、人望があつて、顔がいいだけの。

……充分じゃないですか。くっ！

「私が来るべき場所じゃないなんて、勝手に決めつけなないでください。私、一年前とは違うんですから！」

彼女の完璧っぷりに心が折れそうになりつつも、毅然と立ち向かいます。

「学園の二年間でまったく成長しなかったキミが、たった一年でどう変わったって？」

「あれれ、セシルほどの優等生が知らないんですか？ 女は三日会わなかったら、刮目して見なきゃいけないんですよ？」

「ハッ。刮目？ キミなんか半目で充分だよ。半目でね」

「じゃあ私は白目ですよ！」

「ふうん。ならボクだって白目だね！」

「はああ？」

「はあああああ!？」

「まーまー。セシルってば」

謎の対抗心を燃やして白目と白目でにらみ合うことになった私達のあいだに、ローゼリアが割って入ります。

「そんなにムキにならなくてもいいじゃん。ドーセドンケツが試験に受かるワケないんだからさ」

ふむ、と納得しかけたセシルでしたが、少し考えたあとに、うんざりした様子で首を横に振りました。

「いいや。おこぼれで受かる可能性だってある」

「おこぼれ？」

「ああ。ティアレットの試験は、魔物を倒し、魔石を回収するというものだからな。今回もどうせ同じ内容なんだろう？」

「ええ、その通りよ」

気だるげな受付のお姉さんが、試験の内容を説明してくれます。

私達はこれから、西に一時間ほど歩いた場所にある【浅闇の洞窟】へ行き、魔物を倒さなければなりません。

魔物は死ぬと肉体が消滅し、魔石という結晶体に変化します。

それをひとつでも持ち帰れば、試験合格とのこと。

セシルが問題にしているのは、魔石の種類によって、冒険者ランクが決まる点です。

例えば、洞窟ネズミの魔石を持ち帰れば、ランクは最低のFから。

【浅闇の洞窟】で一番の難敵とされている猛毒サソリの魔石ならランクはDからのスタートとなります。

ランクによって報酬の高い依頼を受けられるようになるので、みんな上を目指します。結果、Dランクを目指す人は、その過程で倒した洞窟ネズミの魔石なんていりません。

セシルは私が、いらなくなつた魔石を譲ってもらおうとしている——そう思っているようなのです。

「そんなズル、するはずないじゃないですか」

「そう言つといて、いざ洞窟に入つたらおねだりするんだろ？ 決まり切つたことさ」

「失礼にもほどがあります。それなら私はこの試験、みんなのなかで一番いい魔石を持ち帰ります。それなら文句ありませんよね！」

一番いい魔石なら他に譲るはずないんですから、おこぼれをもらったという疑惑は完全払拭です。

「ふうん。じゃあ、もし一番じゃなかったら？」

「そのときは、私は合格を辞退して、冒険者にはなりません。どうですか？」

「ふん、そこまで言うなら構わないよ。一番になれないのはどうせ決まり切つたことさ」  
こうして私は、自分から不利な条件をつきつけてしまったのでした。

しかも、こつちが賭けに勝つたらなにをしてもらうかも言わずに。  
何度考えても、これじゃ損しかしてません。  
どんくさ、ここに極まる、です。

\*

試験会場である【浅闇の洞窟】までの一時間は、大変な苦痛でした。

一緒にいるのは二年間、学舎まなびやをともにした人達でしたが、友達は無言を貫く私をよくよそに、みんなは楽しそうです。

「ドンケツハンナ、前と全然変わってないよねー」

「セシルにケンカを売るとか、身の程知らずもいいところ」

「一年前も馬鹿のひとつ覚えみたいに突つ込んでいつてさ」

「まるでイノシシだったよね！ 武器は細身剣なのに、フットワークがさあ」  
「ドスンドスン！」

ギャハハハ、と起こる笑い声。

セシルに突つかかつていく私を見て、一年前のことを思い出したのでしょうか。

無謀にも学園トップのセシルと決闘し、退学となったドンケツの私。

しかも一年後に鈍器を持って再登場。……ネタとしてはなかなか香ばしいです。

ああ、これなんて罰ゲーム？

この場にセシルがいればもう少しみんな大人しくしてると思うのですが、彼女はもう、一流の冒険者。試験についてくるはずありません。

賭けをしたんだから、見に来るくらいすればいいのに。

どうせ私の負けを確信してるんでしょう。

一番いい魔石はローゼリアが持ち帰るに決まってる、と。

ローゼリアは性格最悪ですが、魔法だけは上手ですからね。

不正を監視するためについでにきている試験官のベテラン冒険者さんも、彼女の活躍には期待しているようです。

さて、果てしなく感じられた旅路は終わり、私達は森のなか、洞窟の入り口へとたどり着きました。

「では試験を開始する。魔物に勝てないと思ったら、無理せず引き返せよ。はじめ！」

試験官のおじさんによる掛け声で、同級生達が一齐に洞窟内へなだれ込みます。

みんな、三年生の実習で魔物の相手をしたんでしょう。恐怖したり、ためらったりする

様子は微塵みじんもありません。

私はというと、ぶっちゃけややビビってました。一番をとると大言をはいた私ですが、まだ魔物とは一度も戦ったことがないので。

鈍器スキル、役に立ってくれますよね……？

「どうした？ 君も行きなさい」

試験官にうながされ、ようやく洞窟に入ります。

大丈夫、自分のレベル、いくつだと思ってるんですか。

1億ですよ1億。どんな魔物にも、負けるわけがありません。

みんなのあとを追いかけ、洞窟内の開けた場所に到着しました。

魔物との戦闘はすではじまっています。

みんな剣や槍やりを振るい、魔法を唱えて、洞窟ネズミの群れを相手に奮戦しています。

ネズミと言っても、大きさは豚と同じくらいあります。ネズミは猫さんに食べられます

が、洞窟ネズミは猫さんを食べてしまうのです。

猫さんがかわいそうです。これは私が倒して、まだ見ぬ猫さんを守るしかありません。

冒険者志望者十一人に対し、洞窟ネズミは十体。ここでネズミを倒しきれば、ほとんどの人は合格する計算です。

私も、変な賭けをしてなければここで合格を拾えたんでしょーけど——  
ああ、バカバカ。ソツ女。

「うわー、なに？ 本当にソレ使うつもりなの？ ヤダヤダ、ヤッバーい☆」  
私が構えた大ハンマーを見て、ローゼリアが笑います。

「それってつまりアレでしょ？ 剣のレベルが上がらないから、技術のいらない、叩くだけの野蛮な邪教武器を選んだってことでしょ？ ドンケツすぎてつらみがヤバーい！」

「ふん。なんでも言うてください」

まずは鈍器が通用するか確認です。自分のほうへ向かってきた洞窟ネズミを叩こうと、ハンマーを振りかぶりました。

ところが、です。

「ファイア・アロー——」

瞬間、横からかすめるように飛んできた火の矢が、洞窟ネズミの首筋を貫き、体毛を燃え上がらせた。

「ざーんねん。その魔物はアタシが倒しちゃいましたあ」

ローゼリアが杖でこつんと自分の頭を叩きます。

「ひどっ！ 横取りじゃないですか！」

「えー。別に誰がどの魔物を倒すとか、ルールなくない？ さっきのネズミ、名前でも書いてあったのカナ？ でもごつめーん、もう魔石になっちゃったから確認できないね☆」  
そう言つてローゼリアは、足下の魔石を拾います。石、といつてもそんなに硬そうではありません。宝石みたいな見た目のわりに、ローゼリアが手でもてあそぶとグニグニと形が変わります。

むー。もつと文句をつけたいところですが、確かにここでは早い者勝ち。

ムカつきますがしょうがありません。まだネズミはたくさんいるんです。一番近くのネズミに向かって、私は突進しました。

「やああ！」

今度こそ。ハンマーがネズミに直撃しかけたそのときでした。

「【ファイア・アロー——】」

またもや、です。横から飛んできた魔法がネズミを燃やし、魔石へと変えます。

「またまたアタシが倒しちゃいましたあ。ごめんねー。でも、ハンナがトロいのがいけないんだよおー？」

彼女がてへべろしているあいだにネズミは消滅。ゴロンと転がった魔石を盗賊志望の子が素早く回収します。けれど、ローゼリアは盗賊志望の子に怒ったりしません。むしろ、

当然といったご様子です。

「なるほど……、そういうことですか」

つまり私以外は、みんな結託しているのです。

ひとりも不合格者を出さないように。そして、私だけは不合格となるように。

人数分の魔石を回収して、あとでわけあうのでしょうか。そして、おそろく一番いい魔石はローゼリアのものになります。

それを見ていてなにも言わないところからすると、どうも試験官までグルのようです。

おそらく、理事長の息がかかっているのでしょうかね。

【剣闘王】である理事長の権力は、この街では絶対。学園から不合格者を出そうものならどうなるか、彼もよくわかっているのです。

これも不合格者を出さないための『学園の伝統』ってことですね。そして私は、そのおこぼれにもあずかれないくらいダメだったと。

きっと、試験を受けずに冒険者になったセシルは、こんなことが横行しているとは知らないでしょうね。じゃなきゃ、あんなに堂々と私におこぼれがどうのこうのなんて言えるはずないです。

あー、退学になってよかったです。だって学園に残ったままだったら、こんな不正行為

で合格させられていたわけでしょう？

そんなの、絶対イヤでしたよ。

「そういうことなら、私にも考えがあります」

堪忍袋の緒がプツチンしました。

あなた達がみんなで合格を目指すなら、汚いとは思うけど見逃しましょう。

でも、みんなして私の足を引っ張るって……。そんなに私のことが嫌いですか？

ぐっ、とハンマーを持つ手に力が入ります。

それなら、こつちも見せてやろうじゃないですか。

——圧倒的なレベル差ってやつを。

戦意を露にした私を嘲るように、またもやローゼリアが一番近くにいたネズミを先に仕留めようとしています。

「フアイア——」

しかし、魔法が発動するよりはやく、私はぶん、とハンマーを横薙ぎに振りしました。

はたから見たら、なにやってるんだって感じだったでしょう。

私とネズミとのあいだには、まだまだたつぷり距離があったのですから。

しかし、あら不思議。ハンマーが通過した空間に生まれる半透明の釘。

その数は、実に千本にもものほります。

ドストドストドス！

それらはひとつひとつが意思を持つているかのように飛び、洞窟ネズミ達に残らず突き刺さりました！

「な……！」

今度は私が、みんなのネズミを横取りする形になりました。

「い、今のなんなの!？」

ぼかんとする人が多いなか、ローゼリアだけが驚愕し声を震わせました。なにが起きたのかちゃんと見ていたのは、私の邪魔に集中していた彼女だけだったのです。

「鈍技【千本釘】です」

「ま、魔法……?？」

「鈍器スキルです。長いので言い換えて鈍技。空気を叩いて、釘に変えたんです」

まあ、魔法と勘違いするのも仕方ないですかね。空気に混じっている魔力を固めて釘にしているわけですし。

でも、魔法って言うと、鈍器の神様がすねるんですよ。だからわざわざ訂正しなきゃいけないんです。鈍器スキルも鈍技も、響きが全然かわいくないです……。

「い、いやいや、なにもとにも取り合ってるんだよローゼ。俺達の攻撃がじわじわ効いて、たまたまこいつがハンマーを振った瞬間に倒れただけだろ。まぐれまぐれ」

戦士志望の男子が言うと、ローゼリアはその言葉にほっと胸を撫で下ろします。

「そ、そーだよ。ドンケツが遠距離全体攻撃なんて使えるワケないし！」

彼女はそう自分に言い聞かせると、盗賊志望の子に目配せして、魔石を回収させます。おこぼれにあずかったのはあなた達でしょとツツコミたかったですが、まあいいです。セシルと約束してしまった私は、もっと強い魔物を倒さなきゃいけないんですからね。

「さあ、次だよ、次！ 猛毒サソリはアタシが倒すんだから！」

「さすがローゼ、頼もしー！」

「ローゼなら絶対、やれるって！」

わいわいと盛り上がる同級生達。

ローゼリアもまた、私の鈍器スキルは見なかったことにしようと思ったみたいです。

あーあ……。それにしてもガツカリです。

どうやら私は、なんだかんだちよっと期待してたみたいなんです。

鈍器スキルで、同級生達を見返してやれるんじゃないかって。

私だってやればできるんだって、みんなが認めてくれるんじゃないかって。

でも、この感じだと無理そうですね……。

仮に私が一番いい魔石を手に入れても、まぐれ、たまたまで終わらせられそう。

私が使ってるの、いかんせん鈍器ですしね。

カッコよさが誰にでもわかりやすいのは剣、なんだよなあ……。

剣、やっぱり憧れるなあ……。

セシルみたいに颯爽と敵を倒せたのなら、きつと全然違うのにな……。

そんなことを未練たらしく考えながら、洞窟内を進みます。

路は少しずつ下へ、下へと向かっています。

しかし、この洞窟は、そんなに深くはありません。

【浅闇の洞窟】の名が示す通り、ここは初心者向けの低層ダンジョン。

敵も強いのはほとんど出ないのです。

「にしても、モンスターの量、多すぎじゃね？」

先頭を進む戦士志望の男子がほやきました。なんだかすごい勢いで奥からネズミが出てくるんです。まるでなにかに住処を奪われたかのように。

「うーん、おかしいな……。普段はもつと狭い場所に潜んでいて、こんなに一度に出てくることがないんだがなあ」

試験官のおじさんも同情的です。お守り役の立場なので手を貸してはくれませんが。

Eランクをもらえる吸血コウモリなどを倒しながら、先へと進んだところ——お目当ての魔物が現れました。

毒のトゲがついた長い尾を持つ魔物、猛毒サソリです。

思ってたよりずっとデカいです。両手のハサミなんて、人間の胴体をスパッと両断できちゃうくらいサイズのサイズです。

「アレを倒せば、Dランク……！ そしたらセシルともパーティを組める！」

ローゼリアはうつすら笑うと、呪文を唱え始めます。

セシルは今、Cランク。ランクがふたつ以上違うと、一緒に冒険をしようと思ってもギルドから正式なパーティだと認めてもらえません。

Dランクを勝ち取り、セシルとパーティを組めるようになることが、ローゼリアのモチベーションみたいです。

彼女は呪文の詠唱に、ずいぶんと時間をかけています。どうやら【ファイア・アロー】より強力な魔法を使うようです。

無防備な彼女を守って、同級生達が周囲をかためました。ローゼリアにトドメをささせるため、盾になるつもり満々です。

この場面だけ切り取れば、美しい友情だなあとさえ思えそうなんですけどね……。

おっと、のんびりしてはいられません。

早い者勝ちは、あっちが言い出したこと。私はハンマーを強く握ると、猛毒サソリへと突進しました。

私は私で、レイニーを探すためにどうしても冒険者にならなくちゃいけないんです！

ガツンッ！

「いったあ！」

走っている最中になにかにつまづきました。

ああ、もうやだ。レベルがいくら上がっても、ドジだけは治りません。

涙目で足下を見ると、そこにあつたのは子どもの頭くらいの大きさの、古びた壺<sup>つぼ</sup>。蹴つてもピクリとも動かなかつたので、相当重たいと思われませう。

表面にはやたら細かな文様が彫られてますし、もしかしたら値打ち物かも……。

いやいや、そんなことを考えてる場合ですか。

今は、ローゼリアより早く猛毒サソリを倒すことに集中しないと。

が、そのときです。

『これ、封魔の壺やんけ』

『あらま、解かれとるがな』

ハンマーに宿っている、これまで全然喋<sup>しゃべ</sup>らなかつた鈍器の神様——大小二匹の熊さん達がそうささやきあつたのは。

どうにもその会話が不吉に思え、とっさに猛毒サソリから距離をとりました。

瞬間——ゴウッ、と巨大な炎がサソリを包みました。

さつきローゼリアが使っていた【ファイア・アロー】とは比べ物にならない威力。

彼女がもつと上位の魔法を使ったのでしょうか？

いいえ、違います。

まだ詠唱は終わっていませんでしたし、炎は洞窟の奥側から飛んできました。

なにより、ローゼリアの驚いた顔を見れば、彼女の魔法じゃないのは明らかです。

ズシン、と洞窟全体が揺れ、パラパラと細かな土が落ちてきます。

洞窟の奥で——やたら大きな双眸<sup>そうまへ</sup>が光りました。

「うわあああ！」

同級生のひとり<sup>ひと</sup>りが、尻餅<sup>しりもち</sup>をついて悲鳴を上げます。

「なんでこんなところに、ロックドラゴンがいるんだ？」

ごつごつとした岩の肌を持つ竜、ロックドラゴン。Aランク冒険者ですら手を焼くとい

う大型の魔物が、なんとこの初心者向けの洞窟に姿を現したのです。

「はーん……」

なぜネズミ達が逃げるように洞窟の外を目指していたのか、ようやくわかりました。きつとこのロックドラゴンが目覚めたからです。

おそらく封印されていたのは、この壺のなか。

魔法の力で、竜の巨体はぎゅつと圧縮され、収納されていたのでしょうか。

「お、お前達、ながあつてもドラゴンを刺激するなよ！ 落ち着いて避難しろ！」

試験官さんが声を張り上げますが、冷静に聞いている人はいないようです。

同級生達はあわてふためき、我先にと逃げ出します。

彼らの悲鳴が、ロックドラゴンを興奮させたのでしょうか。メキメキ、と狭い通路を崩しながら、竜がその巨体を広間へとねじこんできます。

「うわああああ！」

強引な侵入による衝撃は洞窟に伝わり、ガラガラと天井が崩れました。

ここで戦うのは、どう考えても危険です。

私もひとまず、洞窟の外へと逃げることにしました。

「ちよつと、みんな待ってよ……！」

そのとき、助けを求めるか細い声に気づきました。

ローゼリアです。

天井から落盤した岩石に、彼女、脚を挟まれてしまっています。

おそらく、同級生達のなかで唯一、竜と戦うべきか迷い、逃げるのが遅れたんですね。倒せたらセシルに褒めてもらえるとでも考えたんじゃないでしょうか。

うーん、無謀というか、自己評価が高いというか……。

「ヤダヤダ、置いてかないでっば！ アタシ、動けないの！」

同級生みんなに彼女は呼び掛けますが、全然気づいてもらえません。

彼らも逃げるのに必死で、後ろを気にする余裕がないのです。

ロックドラゴンが、ズシン、ズシンとローゼリアへと近づきます。

このままいけば、彼女は竜の炎に焼かれるか、瓦礫がれきの下敷きになるかのどちらか。

「ふん、いい気味です」

瓦礫に足を挟まれ、逃げられずにいるローゼリアを見ながら、私はつぶやきました。これまでのバチが当たったんです。

散々私を馬鹿にして……、今日だって合格させまいと邪魔までしてきて。

「た、助けて……。お願い……」

彼女は必死に、離れていく同級生達に手を伸ばします。

同情なんかしませんよ。私がどんなにどんくさくてもわかります。

ここで助けたところで、彼女は感謝なんかしません。次の日にはコロツと忘れ、馬鹿にしてくるに違いないのです。

ロックドラゴンの口内が赤く光ります。炎の息を吐く直前。離れていても、空気ごしに熱を感じるほど。竜の瞳は、ローゼリアに向けられています。

「ひっ、【ファイア・アロー】！」

ローゼリアは抵抗しますが、竜にそんな低レベルな魔法が効くはずありません。むしろ逆効果。竜は怒った様子で、口から漏れ出す炎が激しさを増します。

「や、やだあ。セシル……。ママア……」

ローゼリアはとうとう泣き出しました。同級生達はみんな逃げ終わり、もう残っていません。それを見て、もう助からないと覚悟したのでしよう。

ついに竜の口から、大量の炎が噴き出しました。真っ赤な激流です。直撃すればひとたまりもありません。

「……あーあ。私って、なんてどんくさいんでしょう……」

はあ、とため息をつき、私はハンマーで地面を叩きました。

ゴウン、と凄まじい音がして、目の前に垂直の壁が出現します。

分厚い分厚い、土の壁です。

「鈍技【土壁造】」

炎は壁に阻まれて、一切ダメージを負わせることは叶いませんでした。私にも——その後ろにいたローゼリアにも。

「ハンナ……、どうして」

さすがにローゼリアも庇われたことに気づいたようです。

でも理由を聞かれても、上手く言葉にできません。

私だって、守りたくて守ったわけじゃないんです。

「アタシを、助けてくれるの……?」

「はあ? あたぼーですよ」

イライラしながらも、棟梁の口癖を借りてそう告げました。

「学園にいたとき、あなたは私をことん馬鹿にしてくれましたよね。だから……、その分とことん知ってもらわなきゃ釣り合わないんです」

「な、なにを……?」

「鈍器を持ったときの私のすごさを、ですよ」

口にしてみて、妙に腑におちた感がありました。そうです。

私はローゼリアや同級生達を見返して、仕返しをしたかったわけじゃないんです。ただ——友達になりたかった。

認めあえる対等な存在になり、彼らに鈍器を使う私をカッコいいと思ってほしかった。私と友達になりたい、今からでもなろうと、みんなから言っただけじゃなかったんです。でも、そんなの無理でした。

みんな鈍器を馬鹿にするし、強くなったことにも気づいてくれない。

もしくは気づかぬふりをする。

……なんで、泣けてくるんでしょう。

今はロックドラゴンを倒すことに集中すべきなのに。

炎が収まると、ポロポロと土の壁が崩れました。

竜は完全に、私を敵として認識したようです。ぐるり、と巨体を団子のように丸めて、回転しながら体当たりを仕掛けてきます。

ガガン、と鳴り響く、重く鈍い音。

「ハンナ！」

ローゼリアが叫びますが、私はなんともありません。

「ドラゴンさん。……この程度の攻撃で、私を潰せるつもりですか？」

むしろダメージを負ったのはあちらのほうです。私の持つハンマーが、竜のゴツゴツした岩の鱗にめりこみ、グチャグチャに粉碎していました。

「鈍技【鑑碎き】です」

説明するまでもないと思いますが、これは重装鎧や、防御力の高い外皮を破壊するためのスキルです。

竜が悲鳴を上げ、丸めていた身体を戻します。

無防備もいいたところ。ここが勝負を決めるタイミングです。

「鈍技【空気の杭】！」

私がハンマーを振ると、空中に半透明の杭が出現します。

【千本釘】で生み出される釘よりも数は少ないですが、一本一本は遥かに大きい杭。

それらは勢いよく竜へ向かって飛び、巨体に突き刺さります。

ギャアアアアアア！

ロックドラゴンは痛みに身もたえません。その隙に、私はめりこんだ杭を足場にして竜に駆けのぼると、ラストで思い切り飛び上がりました。

落下に合わせて、ハンマーを振るいます。

「鈍技——【頭骨粉砕】！」

ズ鈍ツツ!!!

ハンマーがバアア、と光を放ち、竜の頭部にぐしゃりとめりこみます！

鈍技【頭骨粉砕】。

その名の通り、頭蓋骨を粉砕し、敵を絶命させるスキルです。

あ、念のため言っておきますが、スキル名がダサイのは私のセンスじゃありません。名称がスキルツリーに書いてあるので、仕方ないのです。

私だって本当は【ウインドアリア】みたいな、横文字のカッコいいスキルが使いたいですよ。わかっています？

こんな悲しいこと、二度と説明させないでくださいね……。

圧倒的な防御力を誇るロックドラゴンも、頭を潰されてはたまらなかつたようです。ズシン、と巨体を横たえ、ついには大きな灰色の魔石へと変化しました。

「アンタ、本当にハンナ……？ あ、の、ドンケツの……？」

地面へと降り立った私に、ローゼリアが信じられないものを見るような眼差しを送ってきます。

「あたほーです。トロくてどんくさい、あのドンケツハンナですよ」

そう返すと、ローゼリアは怯えたようにビクリ、と震えました。これまで私にしてきた仕打ちを思い出したのかもしれない。

私は自嘲げみに笑いました。やっぱり友達になるなんて、夢のまた夢ですよ。

複数の足音と、同級生達の声が近づいてきます。

おそらく、洞窟を出てからようやくローゼリアがいなことに気づいたんでしょう。

ふーん、友達のために戻ってくるなんて、いいところもあるじゃないですか。

その友達のなかに私が含まれていないのが、とても残念です。

\*

なんかかんやありました、私達はひとりも欠けずに街へと帰還しました。

ローゼリアの怪我も、すでに同級生の回復魔法によって完治しています。

全員、なにかしらの魔石を手にしていて、命の危険にさらされたばかりのわりに、表情

は明るいです。

冒険者ギルドに入ると、セシルがローゼリアの元に駆けつけました。

「聞いたよ。なんでも突然出現したロックドラゴンを討伐したそうじゃないか。さすがはローゼだね！」

ギルド内にはすでにロックドラゴンが出たという情報が広まっているみたいです。

しかも一部間違っている情報が……。

「あ、あのね、セシル……」

「あれ？ キミが持つてる魔石は、猛毒サソリの？」

それはローゼリアが瓦礫のなかから拾ってきたものでした。しかもサソリは竜が放った

【**炎の息**】で焼け死んだので、実は彼女が倒したわけじゃありません。

セシルはようやく賭けを思い出したらしく、ハッとこちらに目を向けます。

もちろん私の手には、他の魔物のものより一回り大きな、灰色の魔石がありました。

セシルは綺麗に整った眉を思いっきりひそめます。

「ローゼ……。キミともあろう人が、同情から彼女に一番いい魔石を譲ったのか？」

うわあ……。めちゃくちゃ勘違いしてます。

ローゼリアって、そんなに性格いい子じゃないですよ？

「いつも言っているだろう。冒険者は実力主義。力のない者は仮に冒険者になれたとしても長生きしないって」

見当外れな想像はみるみる膨らみ、ついには見当外れな説教へと発展しました。

うーん、セシルってなにげに天然なんでしょうか……。

私がロックドラゴンを倒したとは、露ほども思っていない様子です。

「あ、あのね……」

なにか言いたそうにしつつも、もごもごと言葉を濁すローゼリア。その間に、同級生達がセシルの勘違いを悪化させてしまっています。

「いや。違うんだよ、セシル。ハンナはローゼが脚を怪我したから、その隙に魔石を横

取りしたってわけ。信じられないよな」

「結局、おこぼれで合格したのよ。恥知らずにもほどがあるわよね」

さも見ていたかのような同級生達の発言です。脇目も振らずに逃げ出したの、どちらさまでしたっけね。

全く、そもそもおこぼれにあずかっているのはローゼリアのほうなんですよ。

でも、誤解を解ける唯一のダークエルフはおろおろするばかりで、全然真実を語ろうとはしません。

気持ちばかりですよ。自分がドンケツだと貶めていた相手に命を救われた、だなんてカッコ悪いでもんね。

私自身が真実を告げることも、できないわけではありません。でも、信じてもらえるはずがない以上、やるだけ無駄でしょう。

それに「こんなにすごいことをやったんだ」って自ら主張するなんて、カッコ悪いじゃないですか。

棟梁が見ていたら「漢おとしのすることじゃねエ」って絶対言いますよ。

私、漢じゃないですけど。

「……いいさ。確かにキミは一番の魔石を持ち帰った。冒険者になるのは認めてあげる」セシルは敵意をむき出しに、黙ったままの私をにらみつけてきます。

「でも、忘れないでほしいね。ボクや、ボクの父がいるティアレットで、そんな卑怯ひきょうな手を通じ続けると思ったら大間違いだってね！」

そう吐き捨てると、怒り心頭のセシルはギルドを出ていってしまいました。

「やれやれ、ですな……」

賭けに勝ったのに踏んだり蹴ったりって、これどうなんでしょう。

ハイグレードな魔石を持ち帰ったものの、私がもらえた冒険者ランクはD。

結局、猛毒サソリの魔石と同じ扱いです。

さすがにルーキーでロックドラゴンを倒すなんて例外すぎたみたいです。それに受付のお姉さんも本当に私が倒したのか半信半疑のようでしたし。

まあ、多くは望みません。

なにはともあれ、ですよ？

ついに——念願の冒険者になったのです！

同級生のみんなも、ランクの差はあれど全員合格。

ギルド内ではベテラン達も交え、お祝いのパーティが始まろうとしています。

私の居場所？ そんなのはもちろんないので、みんなに気づかれないよう、足早にその場をあとにします。

さて、今日はどの宿に泊まりましょうかね。

ご飯がおいしいところがいいんですけど……。

そんなことを考えながら繁華街を歩いていると、後ろから足音が聞こえました。

「ハンナー！」

振り返れば、やってきたのはローゼリア。わざわざパーティを抜け出してくるなんて、今日のことを口止めでもするつもりなんでしょうか。

別にそんなことしなくても、言いふらしたりしないのに。

怪訝けげんに思っている私に向かつて、ローゼリアはなにかを放り投げました。

「えっ、な、なに？」

投げられたものを受け取ろうとしましたが、わたわたと取りこぼしてしまいました。

私のどんくさをなめてはいけません。

いくら鈍器スキルを身につけ、基礎能力が上がっていても、本質的なところはなにも変わっていないのです。

「地面に転がったものを拾い上げていたら、ローゼリアがバツと頭を下げました。

「……今までゴメン！ それと……、ありがと」

一方的にそれだけ言うのと、たたたたたとギルドのほうへ戻っていきます。

ローゼリアが投げたのは、ヒモのついた、ちっちゃなクリスタルの飾り。

どうやら彼女が杖つえにジャラジャラつけてたストラップのひとつみたいです。

要するにこれをお礼にくれる、と。

「うーん……」

あんまり自分の趣味じゃありません。もしかして、これでこれまでのことを全部謝ったつもりなのでしょうか。だとしたら、自分のやってきたことを軽く考えすぎでは？

「……まあ、そんなに悪い気分じゃないですけどね」

今日の宿ぐ飯は、ちよつとリッチなメニューを選んでみてもいいかもしれません。

続きは、9月19日発売のファンタジア文庫で！

©Donki Yamada, Tsubame Nozomi 2020